

私には、大好きなおばあちゃんがいます。でも、おばあちゃんとは呼ばず、「ひいちゃん」と呼んでいます。私には、おばあちゃん二人とおばあちゃんがいて、三人ともおばあちゃんだとかやこしいので、名前からとって、「ひいちゃん」と呼ぶことになったそうです。おばあちゃんの友達や、お母さんの友達にもそう呼ばれていて、私には自慢のひいちゃんです。

小学校一年生のときから、お母さんの仕事の関係や、おばあちゃんの家が学校から近いこともあり、下校はずっとひいちゃんの家に戻っていました。学校から帰ると私の大好きな物がおやつとして用意されています。そして家に帰るときには必ず手をつないで、

「今日もとっても頑張ったね。」

と、ほめてくれて、

「また明日ね。」
と話して帰ります。手をつなぐ理由は、前にテレビで、一日何回か大切な人と手をつなぐと幸せな気持ちになって長生きできるということをやっているのを見たからです。それからずっと二人で続けます。

こんなすてきなひいちゃんは、他の人にもとても優しいです。昔はボランティアで手話通訳をしていました。今はひいちゃんの友達が目まいがして体調が良くないときは買い物に連れて行ってあげたり、季節ごとにお花見に誘ったり、ご飯を作ってあげたりしています。そんなひいちゃんをずっと見てきているからか、私のお母さんも困っている人がいるとすぐに助けにいきます。全く知らない人でも、お店の中で困っているおばあさんがいると助けていて、いつも

私はそんなお母さんがすごいなと思っていました。

昔、お兄ちゃんとお母さんと二人で買い物に行ったとき、お母さんの知り合いの人に会いました。お母さんがおじぎをすると、その人が近づいてきて、手でジェスチャーをしたのと一緒に声を出しました。けれど、言葉が話せないみたいで、そこで手話をしているのに気づきました。

「この子が上の息子でこつちが娘だよ。大きくなったでしょう。」と私たちの頭に手を置きながら話していました。私もお兄ちゃんもびっくりして、私は聞きました。

「ねえ、なんで手話じゃないのにお話しできるの。お母さん手話使ってたなかったじゃん。」

「ああ、少しは分かるころもあったし、口の動きとか発してくれる声でなんとなく伝わるし。相手の人はお母さんの口を見て理解してくれるから、ゆっくり話せば困らないよ。」

聞こえないから話せない、手話ができないから無理だって思った私には、お母さんがしたことがすごいことに思えました。けれど、お母さんには普通のことだったことがもつと驚きました。

ある日、コンビニでカードを買いたいとお兄ちゃんが頼んだので、コンビニに行きました。私は買いたい物が特に無かったけれど、お母さんがお菓子を見ようと行ってくれたので、私も買って三人でレジに並んでいました。お金を払ったとき、いつもお兄ちゃんと私は買った物を持つようにしています。これもいつもお母さんから、ひいちゃんと一緒に出かけるときに、大変だから荷物は持つてあげて、できることは手伝って当たり前だと言われてきたから、当たり前だと思っていました。そのときには、お母さん達も必ずありがとうと言ってくれました。

そのコンビニのときにお母さんと私は先に車に乗って、お兄ちゃんがごみを捨ててくるのを待っていました。なかなか来ないから心配してお店の方を見てみたら、ぜんぜん知らないおばあさんが荷物

を持ったまま入り口のドアが開けられなくて困っていました。すると、お兄ちゃんが来てそのおばあさんの荷物を持ち、ドアを開けておばあさんがお店から出るまで、ずっとドアを支えていて、出てきたおばあさんに荷物を渡していました。そのとき、おばあさんが少し話しかけていて、小さくおじぎをしました。車に帰ってきたお兄ちゃんに、

「何やってたの。」

とお母さんが聞くと、

「たまたま出るときに荷物が重くて出られなかったみたいだから、ドアもつてただけ。」

「ええ、めっちゃ優しいじゃん、すてき。」

とお母さんはとても笑っていました。

「何話しとつたの。」

と気になったので私は聞いてみました。

「いい子だねえ。本当にありがとう。」

と言われたと教えてくれました。お母さんもお兄ちゃんも私もなんだかみんな笑顔でとてもいい気分だなと私は思いました。

この出来事をひいちゃんにも話しに行きました。ひいちゃんはとてもびっくりしていて、

「ひなもせなも本当に誰に対しても優しい人で相手の心がうれしくなることが進んでできる子だよ。ひいちゃんはそんな二人のおばあちゃんでもつてもつてもうれし。」

と言ってくれました。私にとって、お兄ちゃんがしたことや、いつも自分がひいちゃんや友達にすることは、やってみるのが普通のことでした。たぶんそれはお兄ちゃんも同じだと思います。お兄ちゃんがドアを開けたのは、自分が早く出たかったからではなく、おばあさんが困っているから開けてあげたのです。それをすごくほめてもらったから、驚いたし、うれしかったのではないかと思いました。

昔、手話を使わずに知り合いと話をしていたお母さんも、友達が

体調が悪いときに車を出してあげるひいちゃんも、ドアを開けてあげたお兄ちゃんも、他の人からしたらすごいことって思うことが自然とできます。私の家族は本当にすごくすてきな家族だと私は思っているし、本当に大好きです。

今、世界ではいろいろなことが毎日起こっています。みんながすごく小さいことでも困っている人の手伝いをしてみたり、自分とは違った考え方の人の話に興味をもって聞いてみたり、怖がらずに手をかしてみれば、お互いの心がうれしい気持ちになったりするんじゃないかな。そうしたら嫌な争いなんて起きることもなくなるんじゃないのかなと思います。私自身も、これから私の家族が当たり前になっているいろいろなことを普通にやっていると、嫌な人になっていきたくいです。世界の人が人の嫌なことをしたり、嫌なところばかりを見たりするのはなくて、相手の気持ちや立場に立っていける世の中になれば、みんなが幸せですてきな日々を送ることができると思いました。

「また明日ね。」

私は今日もひいちゃんと帰ります。手をつないで、笑ってさよならをする、この当たり前の毎日がずっと続いていきますように。